

《論文》

日墨比較をとおしてみる墓前飲食の  
「お供え」の類似と差違

佐々木 陽子

# 日墨比較をとおしてみる墓前飲食の 「お供え」の類似と差違

佐々木 陽子

和文抄録：日本とメキシコとは14時間もの時差があり遠く離れている。しかし、死者に飲食物を供える習俗を共有している。西欧の献花台にあるのは、ろうそくと花のみで、西欧の合理主義的見地からは「死者は食べない」と言われる。日本では、死してものどが渇き飢える死者像が受容される。日本のお盆では今もって一部の地域では墓前飲食が行われている。メキシコの11月1日・2日の「死者の日」は、お盆同様に死霊を墓で歓待し飲食物で迎える。日本では迎え火をたいて霊魂が迷わないようにと、メキシコではオレンジ色のマリーゴールドの花びらを墓から家路までまいて死霊が迷わずに到着できるように配慮され、死者は家人に招き入れられる。日本との類似性を見出しつつも、メキシコではガイコツのお菓子・おもちゃが充満し、「死を笑う心性」「死しての平等」の諧謔と歪んだ平等性は、メキシコの歴史と深い死生観に根差していることを考えさせられる。

キーワード：墓前飲食 死生観 アイロニー お盆 死者の日

## 1 問題の所在



図1 パリ同時多発テロの献花台（『南日本新聞』2015.11.16）



図2 東日本大震災で多くの犠牲者を出した石巻市大川小学校前の献花台（2016年4月20日取得，NPO法人防災サポートおぢや，<http://bs0.seesaa.net/index-5.html>）

パリの同時多発テロでは、欧州各地で献花台に花とろうそくが供えられた（図1）。花とろうそくは、西欧では普遍的な死者への追悼を意味する供え物である。科学哲学者かつ詩的思想家でもあるG. Bachelardは、焰を

凝視することが、我々を詩的な夢想の世界へと誘うとし、焔が我々に喚起する想像力を論じている (Bachelard 1961=2007)。焔は祈りに連結する。また、菊池徹夫は、イラク北部のシャニダール洞窟での発掘作業において、数万年ほど前のネアンデルタール人の墓とおぼしき周辺から数種の草花の花粉がかたまって検出されたことに触れ、ネアンデルタール人が死者に花を手向けたことに触れている (菊池1998:113-4)。「花の弔い」がなされたのか否かの判断に否定的な見解も存在するものの<sup>1)</sup>、死者を丁重に埋葬していたことは確認されている。今日、死者に供えられる花は“sympathy flower”と呼ばれ、献花はおそらく世界中で共有されている行為といえよう。死者を悼み、「共感」「弔意」の思いを込めて贈る花には、死者や遺族に寄り添う贈り手の思いが託されている。花とろうそくは、西欧のみならずアジアを含む世界中で死者への追悼として用いられている。

ガンジス川に浮かべられた死者の魂を乗せているとされる「焔の灯された舟」の流れゆく情景が、テレビ番組 (『NHK BS1』「精霊流しの夜に——ネパール大震災を越えて」2016. 2. 4) で放映されたが、日本の精霊船とかわらないとの思いを抱いた。今日、日本では環境問題の観点から船を流すことへの制約が厳しくなっているが、茨城県の「盆船流し」<sup>2)</sup>は今日でも行われており、島根県など山陰地方での「シャーラ船」については、食物などのお供えを乗せて海へ船を送り出す送り盆の情景が放映された (『NHK BSプレミアム』「新日本紀行——山陰海岸」2016. 4.15)。このように、文化圏の異なるネパールと日本において、霊を船に乗せ送り出す習俗の共通性が見い出される。

献花台での花と焔は、普遍的な追悼装置と言えようが、日本では、花とろうそくのほかに、ペットボトルに入った水やお茶やジュース、そしてお菓子などの飲食物が供えられるのを見かける (図2)。飲食物を供えること



図3 死霊を送り出す準備  
死霊が迷わず墓に帰れるように、マリーゴールドの花弁の道をつくっている  
(Greenleigh, and Beimler, 1998 : 69)

に、日本では違和感がもたれまい。そこには、死しても飢え喉が渇く死者像が明白である。だが、「死者は食べない」との西欧合理主義の前では、死者に飲食物を供える習俗行為は、その非合理性ゆえに説得力を持ちえまい。飲食物を「お供え」する行為には、西欧とは異なる死霊観、死生観が映し出されていると言えよう。倉田勇は食物のもつ精神的意味論をインドネシアの事例によって展開しているが、食する行為を神聖とみなし、「実際に食べない赤子、不在の生者、死者」に食物を供することに光を当てており (倉田1978 : 82)、そこにも日本の「お供え」との類似性を見いだすことができよう。

お盆などに飲食物を死者に「お供え」する日本同様に、カトリック教国メキシコでは、11月1日2日の「死者の日」に、死者の霊魂を墓から迎え入れ、死者の好物を用意しご馳走をつくり歓待し、祭りが終われば再び墓へと送り出す。日本の迎え盆と送り盆の仕組みと類似している。メキシコの首都メキシコ・シティと東京の時差は14時間もあり、お互い地球の裏側に位置する。メキシコでは、死霊を迎えるにも送るにも、鮮やかなオレンジ色のマリーゴールドの花弁を墓と家との間に撒いて (図3)、死霊が迷うことのないように配慮することを知ったとき、この遠く離れたメキシコの地で、日本のお盆と通底する死霊観が存在することに驚きを禁じ得なかった。だが、歴史的背景や社会構造の差異の認識も忘れてはなるまい。メキシコでは、「死者の日」はどこもかしこもガイコツだらけで、ガイ

コツを模したお菓子やおもちゃ、ガイコツの衣装までまっと変装したり、ガイコツが充満する。

貧しい国メキシコから豊かな国アメリカへ向かう不法移民は、アメリカで今日露骨な攻撃を受けている。1970年代80年代においても、メキシコからの不法移民問題は議会で大きな問題となった<sup>3)</sup>。カリフォルニアのイチゴ園で働く実兄をたよりにアメリカへ農業移民として渡った石川好の『ストロベリー・ロード』のなかで描写さ

れた風景や出来事（石川1988a, 1988b）<sup>4)</sup>、Austin American-Statesmanのテキサス州地方紙の連載をまとめた、アメリカとメキシコの国境線を描き出した『ラ・フロンテラ』（Austin American-Statesman 1989）、T. Conoverのメキシコ人に紛れ込んでアメリカ人でありながら国境を越えアメリカ入りする体験をし、メキシコの不法移民を搾取する実態をまとめた『コヨーテたち』（Conover, 1987=1989）の中に、メキシコの貧富の差の大きさ、アメリカとの国境線をめぐる攻防が描きだされている。

メキシコでは、「死者の日」にガイコツが満ち溢れること、それはヨーロッパ中世の「死者の舞踏」<sup>5)</sup>に連なることが指摘されているが、本稿は、墓前飲食をじはじめ死者が家人によって歓待されるという点に日本のお盆との類似性を見出しつつも、メキシコではガイコツのモチーフが充満し、「死を笑う心性」「死しての平等」という諧謔と歪んだ平等性が、メキシコの深い死生観や社会構造に根差しすることに着目したい。

## 2 死者への食・食されることのない食の類型

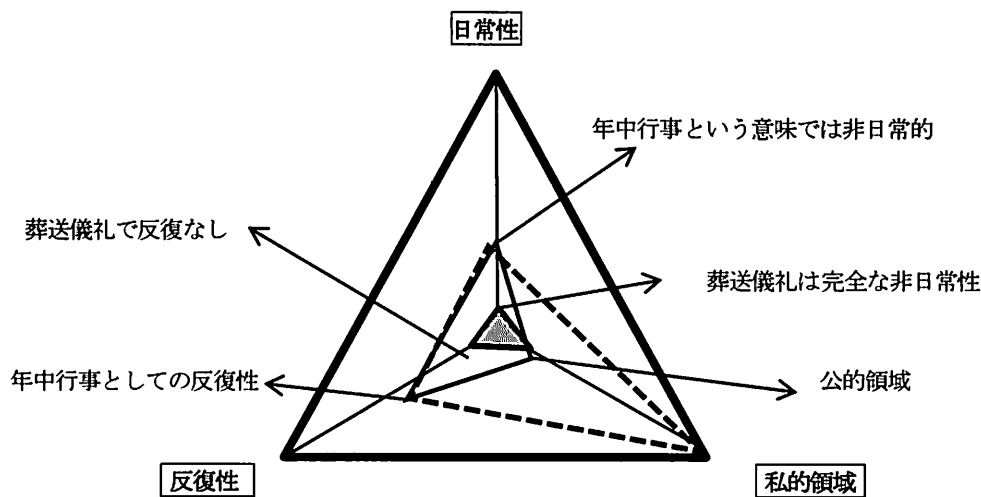


図4 死者への「お供え」の分類

（大きな外枠順）



1. 日常の家庭内での「お供え」～私的領域の仏壇などに、日常的に反復的な「お供え」。基本的には水・お茶・炊き立てのご飯などが多いが、季節物、故人の好物、さらには略膳一式、家人と全く同じ食事などをお供えする事例もあり。



2. 特別な年中行事としての家庭内の「お供え」～お正月・お彼岸・お盆などの特別なハレの日の家庭内の「お供え」。ハレの日のみゆえに非日常的だが、反復性という点では、1年に1回という形での限定つきの反復性を有する。



3. 特別な年中行事としての公的領域での「お供え」～お正月・お彼岸・お盆などの特別な日のお供え物を、墓など外部領域に持っていき、お供えの公領域化。また、「仏のお弁当」と言ったり、盆送りに食事を墓前に用意したりする風習もある。墓では、持ち込んだ重箱を広げ、親族たちは死者と饗宴するなどの事例もある。「墓正月」といって墓前で祝う鹿児島県沖永良部などは、いわば生者と死者の「墓での宴会」といえよう。

4. 人の死にまつわる葬送儀礼の1回性の「お供え」～死者の1回性の非日常食としての「枕飯」や「枕



団子」がこれにあたる。直葬や家族葬などと呼ばれる公的な儀礼を回避する傾向が増しているが、従来の葬儀を例にとれば、公的領域で反復性は無く1回限りの最も非日常性を代表している「お供え」。

本稿は、墓前飲食に光をあてるため、上記の図4の分類では3番を重点的に扱う。

### 3 飲食物の「お供え」をテーマとしての一連の問題意識

戦時の「流行習俗」と言われた「蔭膳」について調べていく過程で、不在者との共食としての「蔭膳」と「お供え」の共通性、すなわち不在者への食という非合理性に、筆者の問題意識は傾斜した。「蔭膳」は生者の無事な帰還を願って、「お供え」は死者の安寧を願って行われるが、食されることのない食を用意する点は共通している。「蔭膳」についての先行研究はわずかながらあるが、「お供え」については、ほとんどない。「蔭膳」の先行研究は、拙稿（佐々木2012）で、すでにまとめているので、ここでは大半を省略し注に記すに留める<sup>6)</sup>。拙稿（佐々木2012）では、65名の聞き取りを通じて、「お供え」を中心にしながらも「蔭膳」も副次的に扱い、その潜在的機能を考察した。あたかも生者に食べさせようと声掛けしたりしている例もあり、これらの習俗行為は、擬制的共食行為にも映った。次に、拙稿（佐々木2013）では、鹿児島県枕崎市に限定し、「お供え」「蔭膳」「墓参り」をテーマに、ジェンダーの視点から分析を試みた。枕崎市は、鹿児島県内で戦禍の最もひどい地であり、また生業を漁業としてきたゆえに、習俗行為が残存しているなど、その特殊性ゆえに着目した。

お盆などハレの日の墓前飲食習俗は、たとえば沖縄の場合は清明祭<sup>7)</sup>のときなどが盛大であり、地域色が豊かに表出している。墓前飲食という習俗行為はいわば死者と生者の共食行為に該当するが、こうした習俗も過去形になりつつあるなか、全国140か所以上の地点の地域図書館、役所や役場、民俗資料館、教育委員会、公民館、生涯学習センターなどのご協力により、多くの情報を知りえた。調査地点のすべての知見は別稿でまとめているため、抜粋した形で概観に留める。青森県はとりわけお盆の墓前飲食が盛んで、40すべての市町村にコンタクトをとった。これについては、別稿にて考察するため、本稿では触れていない。

### 4 日本における「お供え」の外部化としての墓前飲食の実態

前述のように、本章では一部を概観し、視覚資料として入手した資料などを提示することに重点をおく。紙幅の関係で、47都道府県より情報収集が濃厚にできた15の地点のみを提示する。

表1 墓前飲食習俗の有無（全国調査地点よりの抜粋）

（注）

- 1 墓前飲食習俗があるのは、お盆・お正月・清明祭りなどのハレの日がほとんどである。
- 2 以下の記号で墓前飲食習俗の有無を記している。ここでは家の中の仏壇の「お供え」にはふれない。
  - ～墓前にお供えし、その場で宴会のような形で食べる。
  - ～墓にお供えはするが、つまむ程度に食べるだけ。
  - △～食物を墓前に供えるが食べない、あるいは食べるかどうかは不明。
  - ×～墓前飲食事例なし、聞いたことなし、文献資料なし（食物を墓に供えるかもしれないが、そこでは食べない）。

（△と×の境界は微妙）
- 3 全く情報なし、回答なしの都道府県もあった。地点を変えての調査が今後の課題である。
- 4 謝辞：ご協力いただいた140以上の道府県立・市町村図書館ほか、役所・役場、教育委員会、民俗資料館、郷土資料館、生涯学習センターに感謝申し上げます。

北海道	<p>●斜里町（高齢女性からの聞き取りに、浴衣を着てお盆には墓に行き墓前で飲食したこと、周囲が皆そのようにして、にぎわったことなどの情報をいただいた。北海道ゆえに、この方の出身地の習俗を表していると思われる。東北の秋田の習俗事例と似ている。）</p> <p>△稚内市（明治以降東北地方からの入植者に、そうした風俗があるかもしれないが・・・一般的には墓に飲食物のお供えはするが、カラスや野犬が食い荒らすので、持ち帰りが指示されているところが多いようであるとのこと。）</p> <p>○羽幌町（お盆にお供えし、その場で食べる人もいる。お供えのお下がりをいただく感じで食べる。）</p>	岩手県	<p>●北上市（仏壇の供物を墓に持参し、ご馳走を墓前に並べ、仮設の座敷を設け、ご先祖様との共食となる。お盆の最中は、赤飯、煮しめ、焼きナスなどの煮つけ、なますなど4段重ねの重箱に入れてお墓に南瓜などの葉に乗せて供える。送り盆は、煮しめ、てんぷら・・・などで先祖を送り出す。）</p> <p>●△一関市（秋彼岸など団子を墓で食べる、「供えた団子を食べるといい」とのいわれもあり。お盆の墓参りでは、お供えをもって行って、つまむ程度に食べる。これが今日も行われているかは不明。）</p> <p>○△陸前高田市（団子などを持参して墓参りするが、団子など供物を食べる地方と食べない地方に分かれる。）</p>	山形県	<p>●（×）鶴岡市（“墓奴”といって40年ぐらい前まで残っていた習俗で、13日に子どもが墓地にたむろし、墓参りの終わった人が帰ると、墓に供えられた餅や菓子を食べたり、手籠を持ち帰ったりという子どもの行事として記載あり。この類の記載は広範に見られるが過去の習俗のようである。）</p> <p>×山形市</p> <p>×米沢市（墓前での飲食の記載見つからず。）</p> <p>△南陽市（送り団子と言ってなすとダンゴを交互にした“一間とび団子”を作り、みそをつけないのを墓に供え、食べるのはみそをつけ焼く。どこで食べるかは不明。）</p>
秋田県	<p>●仙北市田沢湖町（お盆には、墓祝いの重箱料理をもって共同墓地の広場でムシロを敷き、墓祝いをする。この行為は、「先祖とご馳走を食べる」と言われている。減っては来ているようだが、今日でもお盆では見かけるが、地域は限定される。）</p> <p>△横手市（お盆の墓前飲食はないが、供物を墓前に供える。地域差があるが、赤飯・夏野菜・トコロテン・ソウメン・菓子など。）</p> <p>△男鹿市（お盆に墓に赤飯、煮物、野菜、お菓子、果物、寒天そして飲み物などをお供えするが飲食はしない。）</p> <p>●能代市（地域は限定されるが、墓祝いとして墓前で飲食する。）</p>	東京都	<p>●八丈島（中之郷地区でのみ今も墓前飲食あり。新盆から3年間のみの風習で、ろうそくが燃え尽きればお開きになる。その間、念仏を唱え飲食する。最近は簡素化してきており、念仏をテープで流したり、ちょこっとビールと食べ物ですませるなどもある。）</p> <p>×立川市（不明）</p> <p>×御蔵島（墓前に食物をお供えする習慣がそもそもない。お盆もお花や榊くらい供えるだけ。）</p> <p>×小笠原村（宗教も多様、小笠原の島民は6～7割が本土からのIターンで、欧米系の住民もいて墓前飲食なし。）</p>	福島県	<p>×いわき市（20年ぐらい前までは団子とかぼたもちとか落雁などを、お墓に持っていきお供えしていた。春のお彼岸には精進料理なども持参することもあったが、墓前の供え物を鳥獣が荒らすので禁止されている。）</p> <p>●喜多方市（『喜多方市史』2001年発行に、精進料理を墓に持参し、お参りをした後に、料理をひろげ食べるとある。）</p>
岐阜県	<p>×高山市</p> <p>×恵那市（個人墓を建てていることが多く共同墓地形式ではない。）</p> <p>×中津川市</p> <p>△飛騨市（墓に食べ物をお供えすることはある。米・お菓子・夏野菜など、しかし飲食はしない。）</p>	静岡県	<p>×伊東市</p> <p>×△富士宮市（郷土史家に聞いてもなしとのこと、時には個人として供えることがあるかもしれないが、それは一般的な習俗なのかどうか不明。正月に、墓に鏡餅やそばを供える家もある。ぼたもちなど彼岸に墓に供えることもある。）</p>	新潟県	<p>△佐渡市（土葬の時代は、墓前飲食は行われていたらしいが今は見かけない。地域差があるが、お供えは茄子と米が多い。）</p> <p>●？新潟市（お盆に墓参りでは赤飯を持参し墓前で食べると厄払いになる、と言われていたとあるが、1980年代頃のことのため、今日に通用するかは不明。）</p>

<p><b>岡山県</b></p> <p>×津山市 △新見市（食べ物を入れた箱に入れては行くが供えるだけ） ×萩市 ×真庭市（墓前飲食習俗なし、荒神様の前では、飲食することはない。荒神様は日本の民俗信仰。） △鏡野町（おはぎ・赤飯・菓子・果物などお参りする人が、故人やご先祖様にお供えしたい物を持って行くことがある。） ×備前市</p>	<p><b>島根県</b></p> <p>×浜田市 △隠岐の島町（この島について、最近書かれたものでも、島のスヤ＝木造の小さい祠上の墓上施設で「故人の生前の好物などを供える」とある。お盆やお彼岸にビールや酒がお供えされているのは見かけるが、食物は見かけない。） ×出雲市</p>	<p><b>鳥取県</b></p> <p>×△八頭町（合併前の町に確認したが、墓前飲食の習俗なし、墓に飲食物の供え物の記述はあるが今日もしているかは不明。） △米子市（当地は両墓制でステバカに膳を供えるのは見かける、墓前での飲食はなし。） △琴浦町（ダンゴ・菓子・果物・飲み物が墓に供えられているのは見かけるが、飲食はしない。） △●倉吉市（盆の仏送りで赤飯にぎりを持参し墓にお供えして食したとあるが1985年の記述で今日については不明。お供えはする。）</p>
<p><b>高知県</b></p> <p>×黒磯町 ○土佐市（お供えしたお菓子類などが、鴉に食べられないように、食べて帰る。） ●土佐清水市（四国独特の「タツミ正月」で新盆を迎えた家では墓で餅をお供えし、その後地域により風習が異なるが、全員で餅を投げて取り合ったり、食する事例あり。実施されている範囲は把握できず。「タツミ正月」は新盆の出た家では、餅を墓で引きちぎって食べる儀式だが、四国の一部の地域で行われている。）</p>	<p><b>鹿児島県</b></p> <p>×与論島 ●沖永良部島（墓正月） ●徳之島亀津地区（お盆に親族一同で墓前飲食をする。祖先と別れの日とされるときであるが、踊りありでにぎやか。お盆以外に旧正月、3月3日、5月5日、祖先祭りで簡単な墓前飲食あり。その中でお盆の墓前飲食が、重箱料理が並び豪華。墓前での飲食を記載した資料は複数あり。） ●甕島（「豆オロイ」といって新盆の墓へ地域の人が参り、墓前飲食する地域あり。）</p>	<p><b>沖縄県</b></p> <p>●本島（墓正月で「後生の正月」という。中国の影響の強い清明祭は墓前飲食が豪華に行われる。とはいうものの地域差も大きいようである。清明祭の墓前飲食の供物について書物による記述は多い。墓前で重箱料理がひろげられている写真などもある。重箱に詰める物には地域差があるが、豪華に色とりどりに盛りつけられている。）</p>



図5 秋田県田沢湖町のお盆の「墓祝い」  
～図書館の方からご教示いただいた。かつては角館市でも行われていたお盆の墓前飲食は最近見られなくなった。田沢湖町の一部では、浴衣など着て墓前飲食をするとのことであった（『日本の食生活全集秋田』編集委員会1986：口絵75；関沢まゆみ・国立歴史民俗博物館2015：口絵）。



図6 鹿児島市徳之島亀津の墓での送り盆  
～亀津御出身の方から聞き取りができ、今でも盆になると飲み物や重箱に詰めた食事を持参して墓参りに向かうとのことである。盆送りのために、親族が遠くから集まり、近況報告などもしてにぎやかな雰囲気になるとのことである。盆に限らずお彼岸や命日など飲食物をもって墓参りする人が今もいるものの、かつてほどの賑わいではなくなってきているようである（越間2000：173）。



図7 青森県平内町のお盆の墓前飲食  
～平内町より『盆行事の地域差平成23年8月13日撮影』DVDをいただき、場面を制止させ筆者撮影。民俗学者らも調査に参加している。当日午前中は雨降りにもかかわらず、雨の中、墓前飲食のために訪れる家族もいた。午後に晴れ間が出てくると、一斉に墓がにぎわい、重箱料理をはじめとする飲食物を囲んだ家族が、墓前で宴会をしていた。平内町でも浅所と山口という地区が盛んなようである。

## 5 メキシコの「死者の日」の研究

「死者の日」の文献は、どれもカラー写真が豊富で、祭りの準備、祭りを祝う人々、墓での宴会などが掲載されている。これら文献は、この年中行事の世俗性と宗教性、スペイン征服後の歴史と征服以前のアズティクの歴史の混在ぶりなど学究的に論じているもの、小道具としてのガイコツなどの民芸品や芸術作品に光を当てているもの、日常生活史風にまとめたもの、子どもにもわかるように児童書・教育書風にまとめたものなど多彩である。

### 5.1 総論的・歴史など含む学究的研究

E. Carmichael, and C. SayerおよびS. Brandesの研究が、最も総論的・学究的なものとして位置づけられよう。Brandesは、このテーマの第一人者的存在で、多くの論考を著している。Brandesによると、「死者の日」は、メキシコ人またアメリカに渡ったヒスパニックの人々にとってのメキシコ人としてのアイデンティティを確立する重要な伝統文化である。ガイコツなど死の充満を恐れ気味悪がる傾向に対し、この祭りが生命をむしろ肯定する側面を浮き彫りにし、死を忌避する方向性を逆転させ位置づけている。Brandesの著書では、何枚ものカラフルな祝日の写真が掲載され、さらにアメリカに渡ったメキシコ人にとってのこの祝いの意味づけや、今日の変容にも光が当てられている (Brandes, 2007)。また、Brandesは、メキシコの「死者の日」に満ち溢れるガイコツやズガイコツの芸術的・図像学的な意味を問いかけ、単純に死に取り憑かれた人々としてメキシコ人をステレオタイプ化することに疑義を呈する。図像学的なガイコツの起源や意味の理解は、この祭りの理解にも不可欠である (Brandes 1998a)。さらに、Brandesは、メキシコの「死者の日」に映し出される死生観の研究も行っている。「死者の日」の祭は、本来カトリックの祭と結びつく行事だが、ユニークなものとしてメキシコの内外に知れ渡り、メキシコの国家アイデンティティとしても捉えられるほどである。近年、ハロウィーンがメキシコで急速に広がりを見せているが、「死者の日」との競合とも捉えうる。メキシコにとっての伝統的な「死者の日」が、ハロウィーンによって浸食される状況を、アメリカ帝国主義的な浸食の視点から問いかけている (Brandes 1998b)。E. Carmichael and C. Sayerは、この祝祭を歴史にたどっており、彼らの著作からはその通時的知識が得られる。その著書の前半では、こうした歴史的側面を詳細に分析しながらも、今日の祭の変容にも光を当てている。その後半では、「死者の日」のための民芸細工の製作者などへのインタビューを行っている (Carmichael and Sayer 1992)。

### 5.2 メキシコでの「死者の日」を迎える準備と当日・生活史から

K. Lasky は、1部屋だけの丸太小屋に住む家族の「死者の日」を迎えるに至る情景を描写している。「死者の日は悲しくない。泣くことは終わり、死をあざ笑うための日である」 (Lasky 1994:10) とし、柩が用意され、その中に笑っている死体役の若者が入っていて、死体はオレンジが好きとされているため、オレンジなどが投げ入れられ、その他花束やお菓子等も投げられ喝采をあげせられている。夏が去り冬が到来する秋は、多くの文化圏で死の祝いがあり、ハロウィーンも古代ケルト族 (Celtic) の死の神サンハイム (Samhaim) に結びついたものである。メキシコで死が恐れの対象にならないのは、この世の生活が不快であっても、死後の世界が幸福として描きだされることにも関係する。本書に美しい蝶の写真が登場するが、何千キロも離れたカナダから飛来するこの一群の蝶は、死者の靈魂と結びつけられ捉えられている。貧しい少年の家でも、準備にせわしく市場に出かけ買い物をし、聖卓を飾る。親族が集まり、次の日には墓へ向かう。花やろうそくや果物やパンを運び、墓を飾る。なかには墓でギターを演奏したりラジオ持参の人もいて、共同墓地でまるまる一晩明かす。「死者の日」は、前夜祭も含めると10月31日の夕方から11月2日までで、キリスト教の11月1日のAll Saints' Day (万聖節)・2日のAll Soul's Day (万霊節) に合致し、これらの日には、死者の靈魂が家に帰ってくると信じられている。貧しい田舎の少年の視線から祭りが生活の一部として描写されている (Lasky 1994)。

### 5. 3 メキシコの死生観やジェンダーの視点からの研究

日本で「死者の日」に関連する論考を多く発表しているのが、佐原みどりである。メキシコの「死者の日」について死を人間の敵とせず、笑いの対象としたことに着目し、「死をあざ笑う」ことが、メキシコでは「文化表象」となっているという。ヨーロッパ中世の「死の舞踏」の影響を受けたとも言われるが、民衆画家のポサダ (Posada 1852-1913) は「上流階級のおごりを攻撃し、また同時に中下層階級の卑しさあざを笑うことによって、生の不平等性をも強調した。社会の不正や国民の直面する社会問題をテーマに描いたため、中下層階級から圧倒的な支持を得た」とされ、ポサダの人気は1世紀経っても衰えない (佐原2004a:82)。佐原はメキシコをブラックユーモアの聖地とし、日常的な会話の中にジェンダーそして死生観を考察している。笑えないはずのものである死を笑う、そこに人間の理性と機知が働いているとし、ニーチェを引用し「生の根源的な悲劇性を受け入れつつ、それと戯れて笑う」ことに相通じるポサダの「死者を生き生きと描き出すことによって (または、生者を骸骨姿で表すことによって) 生、死という近代社会において相反する要素を混乱させようとする」 (佐原2004a:83)。スペイン語で「死 (lamuerte)」は女性形であり、女性で表される死は恐怖のみならずエロチックな欲望を孕む。メキシコの哲学者かつ詩人のオクタビオ (Octavio 1914-1998) を引用し、メキシコの死生観を論じている。「我々が理解できない『死』に返答を求める絶望的な試み」が、死をからかい笑い飛ばす。佐原は、オクタビオが「死を怖いものと認めたうえで、その姿に近づくことで恐怖を愛にかえてしまうような心性」を「マゾヒズム」と呼んだことを引用している (佐原2004a:88)。佐原は、メキシコ革命へと導いたともいわれる民衆画家ポサダと娯楽性の強い下層民向け大衆新聞との関わりに着目する。佐原は、忍従・諦念に慣れきって宿命論を受容しているメキシコ下層民衆の「自分自身を笑うことによって得られる解放感」を指摘し、「皆だれもガイコツになる」というセリフで、階級社会を風刺し、こうした社会風刺の解放力の機能を、民衆画家のポサダを通して分析している (佐原2005b)。さらに、佐原はメキシコで「エクスポト」と呼ばれる奉納絵 (あえて言えば日本の絵馬にあたるであろうか) に着目する。スペイン人によってもたらされたこの習俗は、19世紀後半から20世紀中盤、殊に盛んに行われた。佐原は、人事ではいかんともできない死や不遇のなかでの人間の無能さが表出した「心象スケッチ」としてこの奉納絵を捉え、ジェンダーの視点から、メキシコ女性の絶望、女性の奇跡への願望などを読み解いている。不安を奇跡が癒してくれるという土着の信仰があり、メキシコにおける奇跡は民衆生活に入り込み、「エクスポトは、苦痛や不幸の中から想起する人々の想像力の作品である。より無力な民衆ほど、この想像力を駆使し、心の平安を求めた」 (佐原2004b:57-8) と総括している。さらに、佐原は、女性による奉納が増える傾向にある中、カトリックの教義が、痛みや苦しみを受難する位置に女性を据えていたことを捉え、奉納絵エクスポトが、女性自身が悲しみや願望を表出する主体としての「文化空間」を与えたのではと指摘する。男性優位社会・マチスモ社会メキシコでは、夫からの暴力に耐える妻たちの存在がある。ここからも、メキシコでのフェミニズムの出現の自明性が看取されよう。痛みや苦しみを公にする奉納絵には、女性が体験する苦難と絶望の経験が刻まれ、生活空間の中で描き出されている。公の歴史には登場しない沈黙を守ってきた女性たちの経験を、奉納絵は描写していると捉えている (佐原2004b)。また、佐原は、死の隠喩がメキシコに満ちていることから、死の隠喩から死生観を読み解く。「死を笑う」とか「死と戯れる」とかというふざけた様に響くが、死が人間を支配する「死の勝利」と同時に「死は恐れるに足らず」といった死への無関心を装うなど喜びと悲しみの両義性が看取され、多重的な死生観、しかもその表現が隠喩に満ちているなどを指摘している。佐原が着目するのは、1985年のメキシコ大地震によって、「死者の日」の悲劇的側面に焦点が当てられ、同じ苦悩を担った人々との共感が、「生は威厳のあるもの」といった今までの「死者の日」には見られなかった死への態度の変容を生み出した点である。近年の「死者の日」の新たな動きとして、エイズ患者やセックスワーカーなどのマイノリティーの死に対する態度などにも光が当てられていることをあげている (佐原2005b)。

吉田敦彦はその著書の後半で、「死者の日」の一連の行事や人々の動きを記述しているが、前半では教育現場での死の扱いを論じている。子どもたちが死の問題にほとんど触れない日本の教育が想起される。近・現代が

老いや死をタブー化したとするなら、メキシコの「死者の日」は「死を直視する文化」であり、吉田はこの論考を通じて「不可避の死を直視して生を捉えなおすことの意義」を力説する（吉田 1994：114）。

#### 5. 4 メキシコの表象（ガイコツとアイコン＝聖像など）を照射した美術研究

S. Brandesは、「死に取り憑かれたメキシコ人」というステレオタイプに挑んだ。「死者の日」には、おもちゃ、お菓子など多くのカラフルなガイコツとして溢れ出すことを、多くの研究者はメキシコと西洋との差異と捉えるが、むしろBrandesは、メキシコの死のイメージの奇妙さや多様性を、征服によって多神教が1神教のキリスト教にとって代わられた歴史を踏まえ、「キリスト教の伝統とメキシコの芸術的で文学的なコレクション」とのつながりから説明する（Brandes 1998a）。C. Sayerは、メキシコの数々の祭りに、メキシコ元来の伝統にスペイン統治によってもたらされたカトリックの影響が溶け込みながらも、メキシコ独自の文化が展開したことに着目する。それらを、死者が生者を訪れる日とされる「死者の日」の祭の民族的な色彩の濃い仮面、織物、衣装、人形、祭壇など多くの写真を通じて解説している（Sayer 2009）。

#### 5. 5 メキシコ系アメリカ移民にとっての「死者の日」



図8 アメリカへ移民したメキシコの子  
どもたちへメキシコの文化伝統を継承す  
る取り組みとしての死者の日の準備。  
(Hoyt-Goldsmith and Migdale 1994：  
16)

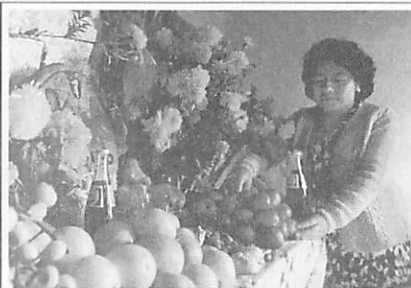


図9 豪華な飾りつけを終えた祭壇  
お供え物としての果物・パン飲み物、花  
で祭壇が飾られる。  
(Greenleigh and Beimler 1998：63)

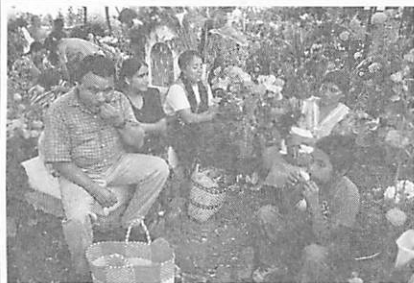


図10 墓に家族で供物を携えて墓前飲  
食  
家族総出で供物を並べる。マリーゴ  
ルドーの花が際立つ。(Doering 2006:15)



図11 夜の賑わいをみせる墓地  
ろうそくの焰に照らし出される墓場。  
(Carmichael and Sayer 1992：64)

「死者の日」について、アメリカに移住してもそのルーツとしてのメキシコの文化・伝統を子どもに伝えるために書かれたのがD. Hoyt-Goldsmith and L. Migdaleの著書で、その著者の意図は、タイトルに『メキシコ系アメリカ人の祝いとして、「死者の日」』とあることから読み取れる。一連の準備から祝いの当日の様子までの流れが、多くの写真と共にまとめられていて、アメリカ移民後もメキシコにルーツを持つことを、「死者の日」の祭を通じて、子どもにもわかりやすく書かれている（Hoyt-Goldsmith and Migdale 1994）。

#### 5. 6 子どもに死者の日を教える教育書・児童書

上記のHoyt-Goldsmith and Migdale (1994)の著書も、メキシコ系アメリカ人の子供向けだが、メキシコ文化を身に付けさせるための啓蒙書・教育書といえよう。全般的にいずれも多く美しい写真があふれている。児童書・教育書にはことのほかカラーの美しい写真が多い。T. Johnston and J. Winterの著書も児童向けであるが、写真ではなくメキシコ的絵画の挿絵を使って子供向けに編纂されていて、「死者の日」の流れがわかりやすくまとめられている（Johnston and Winter 1997）。

## 5. 7 フィールドワークを含む地域性を照射した研究

河邊真次の2つの論考とも、メキシコのワステカ地方をフィールドにしている。伝承や民俗舞踊を取り上げたものもあるが、基本となる問題意識は、「死者の日」と言われながら「死者」の範疇が不鮮明であるとの問題意識である。構造的には、現世にまいもどる死者である肉親は、生者から供物をもらえない場合、生者を死に至らしめるとされている。供物奉納はこの意味で社会規範である。共同体レベルで死者を捉えると、共同体が捧げる舞踊は重要で、そこで死者と呼ばれる対象は個人ではなく先祖を意味する。これこそが、本来カトリックでは重要視されない祖先が、ワステカ地方の民衆カトリシズムでは顕在化している証左であると河邊は指摘している（河邊2006）。河邊は、ワステカ地方で、死者が共同体の生者に影響を及ぼす存在として位置づけられる「ビエホ、老人」と呼ばれる存在に着目する。浄化作用の力を有するとされる「ビエホ」はいわば祖先であり、子孫の病気などの悪を祓い、農業に豊穡をもたらすが、自らを軽んじる子孫には厳罰をもたらす。メキシコのこの地方では、カトリックと祖先崇拜の併存が指摘されている（河邊2003）。

## 6 結語

飲食物などの「お供え」が受容されるのは、アジアなどに限定されると思い込みがちだが、遠く離れたメキシコでも、11月1日と2日の「死者の日」には死者のための飲食物の準備に追われる。そこには、祭壇や墓を花や死者の好物で飾るなど、日本のお盆の仏壇やお墓のお供えとの共通性が看取される。日本ではごく限られた地域にしか残っていない習俗だが、メキシコでは墓前飲食をして夜を墓で明かすこともあるという。墓前飲食は、まさに死者と生者の共食ともいえよう。死者と名指される対象も、故人としての個別の死者ではなく、日本でいう先祖と似た死者像もメキシコの死者像に見出し得る点も日墨に共通している。

しかし、両者を決定的に隔てているのは、「死を笑う」「死と戯れる」という心性の有無であろう。メキシコでは、死に打ち勝つことができないことを知っているからこそ「死を笑い」「死と戯れる」といったアイロニーが生み出され、「恐怖」と「笑い」といった本来併存しえないはずのものを併存させる処世術を通じて、絶望と貧困の日常を切り抜けてきたのであろう。スペインによる征服、とてつもない貧富の差、メキシコ革命、こうした歴史的・社会的背景は日本と異なる。佐原は、メキシコの下層階級の人々が抱く宿命論が甘受されながら、なぜ革命のエネルギーを生み出し得たのかを問題として投げかけている。パロディーと言えようが、「死者の日」に登場するガイコツ人形には、ガイコツとして描き出されても金持ちは金持ちの服装をしたガイコツ姿で登場したりする。死んだら誰もかれも墓の中では同じガイコツのはずなのに、そのおごりは笑える。佐原は、下層の人々が、こうした富者のおごりを社会風刺の笑いの対象とし、かつ自らの不遇や悲劇を所与のものとして受け止めることの意味を考察する。「諦念的態度の素となる宿命論はしばしば変革への希求へと転化することがある」（佐原 2005a：65）との指摘の意味が重く感じられる。

「死を笑う」「死と戯れる」と言ったら、日本では「何と不謹慎な」と眉をひそめられるであろう。だが、メキシコの心性も実は日本と同様に、死の絶対的絶望、抗することのできない暴力性を前に、自己の無力をいやというほど知るしかないとの観点を共有している。メキシコにおけるガイコツのメタファの充満は、富者のおごりを笑って戒めるとともに、貧者の卑屈さ・卑しさを同様に笑って戒めるとの両義性を有する。この2つのベクトルは、佐原が繰り返し指摘している。本稿の最後では、佐原（2005a）が指摘している、富者の傲慢さと貧者の卑屈さの双方を笑いとばす心性の意味を考えたい。もしベクトルが貧しい民衆側から富者への笑いに終止するなら、笑いは処世術にはならなかったであろうし、皮相ナルサンチマンに留まったかもしれない。さらには、貧者の民衆は自らを被害者という弱者の位置に固定してしまう可能性があったであろう。だが、もう1つのベクトル、すなわち貧者が自らの卑しさを笑う対象とするという内向きのベクトルの意味は重いと言えよう。笑いの対象が富者という外部にのみあるのではなく、笑いの対象が内なる卑しい自分たちにもまたあるのだという認識は、潜在的な力になりうるのかもしれない。すなわち、おごりと卑屈さの対構造としての認識は、他者の鏡に映った自己認識に至る道であると考えられるからである。

メキシコのカラフルな色で塗られたお墓が大好きという写真家の蜷川実花は、メキシコの墓前飲食を次のように記している。「祭りの日には親戚一同お墓に集まり、飲めや歌えの大騒ぎ。ギターで弾き語ったり、みんなでダンスをしたり、食べ物の屋台や移動遊園地までも墓地の周りにやって来て、ホントお祭り」（蜷川 2005：67）と。日本では東北、南九州以南に墓前飲食の習俗がみられる。墓に備えた飲食物のお供えを、仏様と一緒に食べ、地域によってはことに南の島ではメキシコ同様に踊りがでるところもある。これらの地域が日本全土から見て周辺部に位置するため、墓前飲食を前近代的習俗とみなされなくもなかろう。しかし、この仮説が正しいとすれば、死者と生者の境界が不動化し越境不可能なものとみなすことが、近代的・進歩的ということになる。死を完全なる非日常として囲い込むこと、それは実は我々自身にとっての恐怖の元凶である死を忘却させる処世術なのかもしれない。能率と業績を追いかけてやまない現代社会にあって、「死を想う」ことは、非生産的である。日本に残っている墓前飲食習俗とメキシコのそれとは、様相を異にするが、「死を向こうへと排除しない」心性を共有しているといえよう。死を囲い込まずに、生者と死者の境界の越境可能性を受容する曖昧さの中にこそ、実は人間存在の根源を問いかける扉があるのかもしれない。

# [註]

- 1) 小山修三は、発見された花の1つであるヤグルマソウが薬草であることをネアンデルタール人が知っていたとしたら、他の解釈も可能ではないかとしている（小山2006：9-11）。
- 2) 環境問題が厳しくなり制約がつかなく、今日でも北茨城の天津漁港では新たな死者が出るのと精霊船を漁船に曳航させ漁港を1周し、亡くなった人に故郷を見せて他界へ送る儀式が行われているという。「故人の霊、海へ 北茨城で盆船流し」との見出しでの記事がある（『茨城新聞』2013.8.17朝刊）。
- 3) 筆者はかつて1981年のアメリカ議会の公聴会資料を通じて、1986年11月6日レーガン大統領の署名を経て、移民管理法が成立する過程の分析を試みたことがある。不法移民を雇用した雇用主に対する罰則を盛り込んだ法案が提出されて、14年の歳月が流れていた。成立に持ち込まれたこの法は、不法移民の雇用に関し、雇用主処罰という「ムチ」をもつと同時に、1982年以前から継続してアメリカに居住してきた外国人に対し、合法的市民になれる道を用意するという「アメ」をも兼ね備えた法なのである（Hearing before the subcommittee on immigration and refugee policy of the Committee on the Judiciary United States Senate, ninety-seventh Congress, first session on employer sanctions, September 30, 1981, Serial No. J-97-61.）。
- 4) 2011年に再出版されたが、もともとは1980年代後半『エコノミスト』に長期連載されたものが書籍化されており、筆者は古い版で読んでいるため、その表記にしている。
- 5) 小池寿子によれば、15・6世紀欧州全土で、生者が死者に連れられて墓場に向かう図像が描かれたが、それらは皆平等に死んでいくことを語った説教絵画であると説明されている（小池2010：v, 42）。
- 6) 「菰膳」については数が限られるものの多様な先行研究が存在する。「菰膳」の場合は、その対象が生者であることが前提視され、無事な帰還への祈願の意味合いが込められているため、戦時の流行習俗と位置づけられたのも理解できよう。「菰膳」は、民俗学では参詣、巡礼、出稼ぎ、入営、出征などで家を空ける不在者に供されてきた事例が研究されている。交通の未発達な時代、戦争ほどではないにしても、旅にでることは生命の危険を伴うとされ、生活を成り立たせる漁に出ることもまたしかりであった故に、無事な帰還を「菰膳」に人々は託したのである。柳田國男、関敬吾、加藤良治などの研究の外に、伊豆諸島の独特の習俗を研究した桜井徳太郎や鹿児島島の離島である奄美の加計呂の特有な習俗に光を当てた大越公平の先行研究などがあげられる（加藤2001；桜井1963；大越1979；関1941；柳田1962）。
- 7) 高橋恵子によると、先祖の供養である清明祭（シーミー）は、清明節（中国の歴法で24節気の1つ、新暦の4月5日頃）に行われ、「子孫が墓前に集まって先祖の供養をし、各々家族の健康を祈願する」。お墓参りをした後、「供え物として、線香、お花、お茶、お水、お酒の他に祝い用の重箱料理を準備する」（高橋2009：158）。

# [文獻]

- Austin American-Statesman, 1989, *La frontera : The Story of the Border*. (= 中嶋弓子訳『アメリカ・メキシコ国境地帯—ラ・フロンテラ「アメリカメキシコ国境地帯」—国家を越えるヒト・モノ・カネ』弓立社.)
- Bachelard, Gaston, 1961, *La flamme d'une chandelle*, Paris: Presses Universitaires de France. (= 2007, 澁澤孝輔訳『蠟燭の焰』現代思潮社.)
- Brandes, S., 1998a, "Iconography in Mexico's Day of the Dead: Origins and Meaning" *Ethnohistory*, 45 (2) : 181-218.
- , 1998b, "The Day of the Dead, Halloween, and the Quest for Mexican National Identity" *The Journal of American Folklore*, 111 (442) : 359-80.
- , 2007, *Skulls to the Living, Bread to the Dead: The Day of the Dead in Mexico and Beyond*, MA: Blackwell Publishing.
- Carmichael, E. and C. Sayer, 1992, *The Skeleton at the Feast: The Day of the Dead in Mexico*, Texas: University of Texas Press.
- Conover, Ted, 1987, *Coyotes: a journey through the secret world of America's illegal aliens*. (= 1989, 菅啓次郎ほか訳『コヨーテたち——越境するヒスパニック・アメリカ』弘文堂.)
- Doering, A., 2006, *Day of the Dead: A Celebration of Life and Death*, Minnesota: Capstone Press.
- Greenleigh, J., and R. R. Beimler, 1998, *The Days of the Dead: Mexico's Festival of Communion With the Departed*, San Francisco: Pomegranate.

- Hearing before the subcommittee on immigration and refugee policy of the Committee on the Judiciary United States Senate, ninety-seventh Congress, first session on employer sanctions, September 30, 1981, Serial No. J-97-61.
- Hoyt-Goldsmith, D. and L. Migdale, 1994, *Day of the Dead: A Mexican-American Celebration*, New York: Holiday House.
- 石川好, 1988a, 「ストロベリーロード 上」早川書房.
- , 1988b, 「ストロベリーロード 下」早川書房.
- Johnston, T. and J. Winter, 1997, *Day of the Dead*, San Diego: Harcourt.
- 加藤良治, 2001, 「かげ膳考」『西郊民俗』177: 7-11.
- 河邊真次, 2003, 「カトリック社会における祖先崇拝研究の可能性——メキシコ・イダルゴ州ワステカ地域における死者の日の事例から」『イスペイン図書』6: 138-46.
- , 2006, 「祖先の来訪とその社会的意義——メキシコ・ワステカ地方の死者の日にまつわる伝承と民俗舞踊の分析を通じて」『説話・伝承学』14: 198-216.
- 菊池徹夫, 1998, 「花とネアンデルタール人」『順天堂医学』44 (1): 3-4.
- 喜多方市史編纂委員会, 2001, 『喜多方市史 第9巻 (民俗)』.
- 小池寿子, 2010, 「『死の舞踏』への旅—踊る骸骨たちをたずねて」中央公論新社.
- 越間誠, 2000, 「奄美20世紀の記録」南方新社.
- 小山修三, 2006, 「ネアンデルタール人と『花の吊い』」『人間文化』4: 9-11.
- 倉田勇, 1978, 「食事慣習論断章—靈魂と食事」『人類学研究所紀要』8: 79-94.
- Lasky, K., 1994, *Days of the Dead*, New York: Hyperion.
- 「日本の食生活全集秋田」編集委員会, 1986, 『日本の食生活全集5 聞き書 秋田』農山漁村文化協会.
- 蛭川実花, 2005, 「『部屋を染める』(5) メキシコ, 死者を祭る国」『Switch』23 (4): 67.
- 大越公平, 1979, 「加計呂麻島芝 (奄美) におけるカゲゼン習俗とカミオガミの行事——家族組織研究の一視点」『南島史学』14: 54-76.
- 佐原みどり, 2004a, 「死を笑うことば—メキシコにおける死のユーモアとジェンダー」『ククロス: 国際コミュニケーション論集』1: 82-96.
- , 2004b, 「心象世界としてのエクスポト——メキシコ女性の痛みの表現と死生観」『ラテンアメリカ研究年報』24: 54-82.
- , 2005a, 「ボサグの大衆新聞にみる死のモラルと宿命論——希望としてのノタ・ノハ」『イペロアメリカ研究』27 (2): 53-68.
- , 2005b, 「死の隠喩と死生観—メキシコ・シティにおける『死者の日』を中心に—」『国際開発フォーラム』28: 165-79.
- 桜井徳太郎, 1963, 「民間信仰成立の基盤——陰膳習俗の源流」『日本歴史』182: 16-33.
- 佐々木 陽子, 2012, 「『お供え』と『蔭膳』—不在者との共食」『現代民俗学研究』4: 25-38.
- , 2013, 「ジェンダーを潜めた習俗『墓参り』『お供え』『蔭膳』—鹿児島県枕崎市を中心に」『地域総合研究』40 (2): 39-53.
- Sayer, C., 2009, *Fiesta: Days of the Dead & Other Mexican Festivals*, London: British Museum Press.
- 関敬吾, 1941, 「蔭膳のこと」『民間傳承』6 (7): 73.
- 関沢まゆみ・国立歴史民俗博物館, 2015, 「歴博フォーラム 盆行事と葬送墓制」吉川弘文館.
- 高橋恵子, 2009, 「沖縄の年中行事——方法と供え物 御願のグイス」那覇出版社.
- 柳田國男, 1962, 「影膳の話」『定本柳田國男集第14巻』筑摩書房, 445-9.
- 吉田敦彦, 1994, 「死から生を見る視線—メキシコの『死者の日』をめぐって」岡田渥美編『老いと死—人間形成論的考察』玉川大学出版部, 88-117.

本稿は、鹿児島国際大学における2016年度前期学外研修（在宅研修）の成果の一部である。

# Similarities and Differences in Food and Drink Offerings : Comparing Japan and Mexico

Yoko SASAKI

Japan and Mexico are distant from each other, with a time difference of 14 hours. However, people in both countries practice the custom of offering food and drink to the dead. In Western Europe, only candles and flowers are offered at altars, and Western rationalism believes that “the dead do not eat.” In contrast, in Japan, images depicting the dead feeling hunger and thirst exist. During Obon, people eat and drink in front of graves in some parts of Japan. In Mexico, on November 1st and 2nd, the Day of the Dead, ancestors’ spirits are welcomed, similar to the Japanese Obon. In Japan, a welcoming fire is lit so the spirits do not get lost; in Mexico, orange marigold petals are strewn on the path from the grave to one’s house to guide the spirits so they can return home to a hearty reception by their family. The resemblance of these Mexican customs to Japanese customs is striking; however, abundant skeleton candies and toys, symbolizing the “attitude of laughing off death” and the notion of “being equal once dead” are ingrained in the profound Mexican view of life and death.

**Key Words:** Eating in front of Graves, View of Life and Death, Irony, Obon, the Day of the Dead